

紙本

特 250

624

河原田農書第五編

メロンの栽培

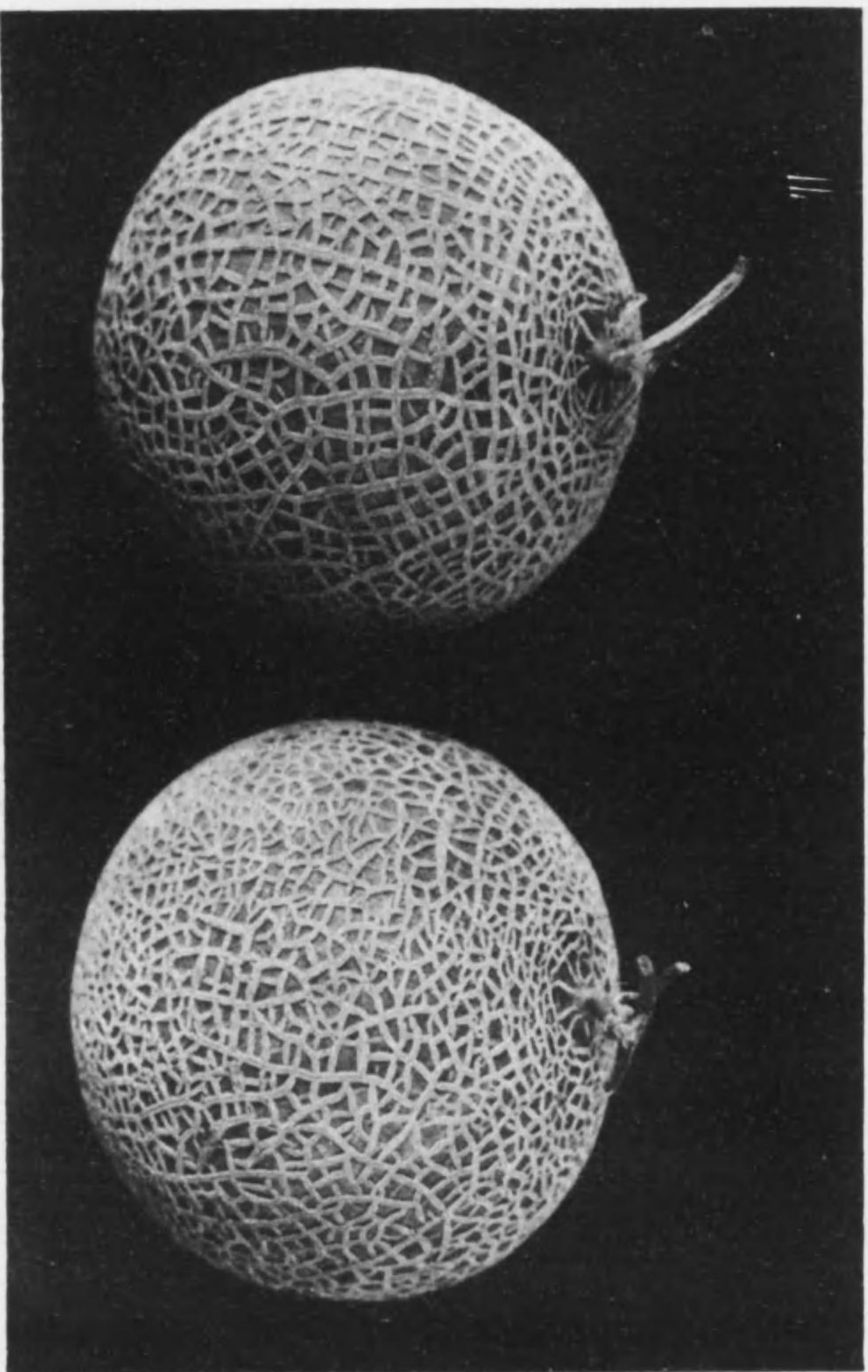
三重縣立河原田農學校



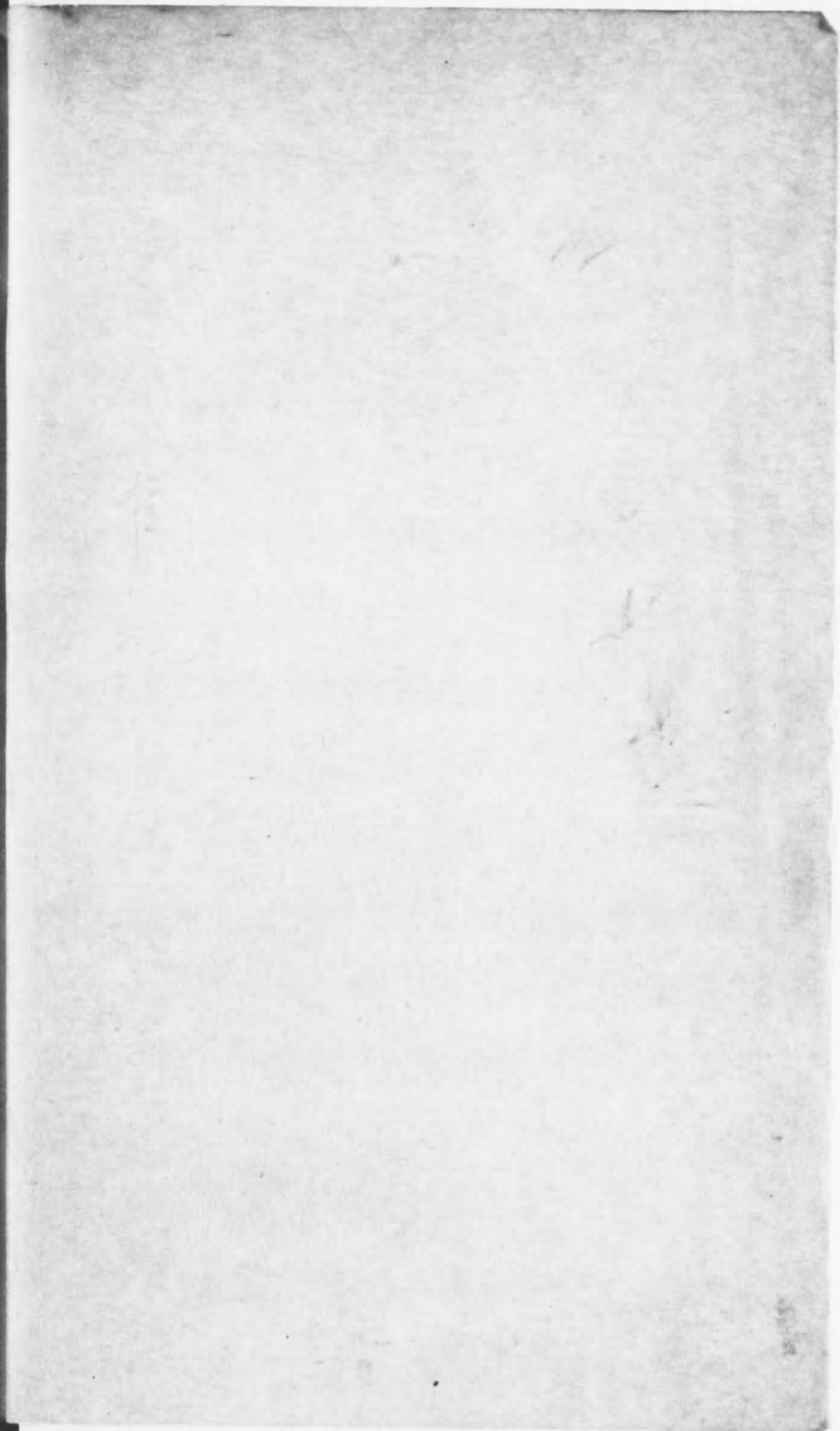
始

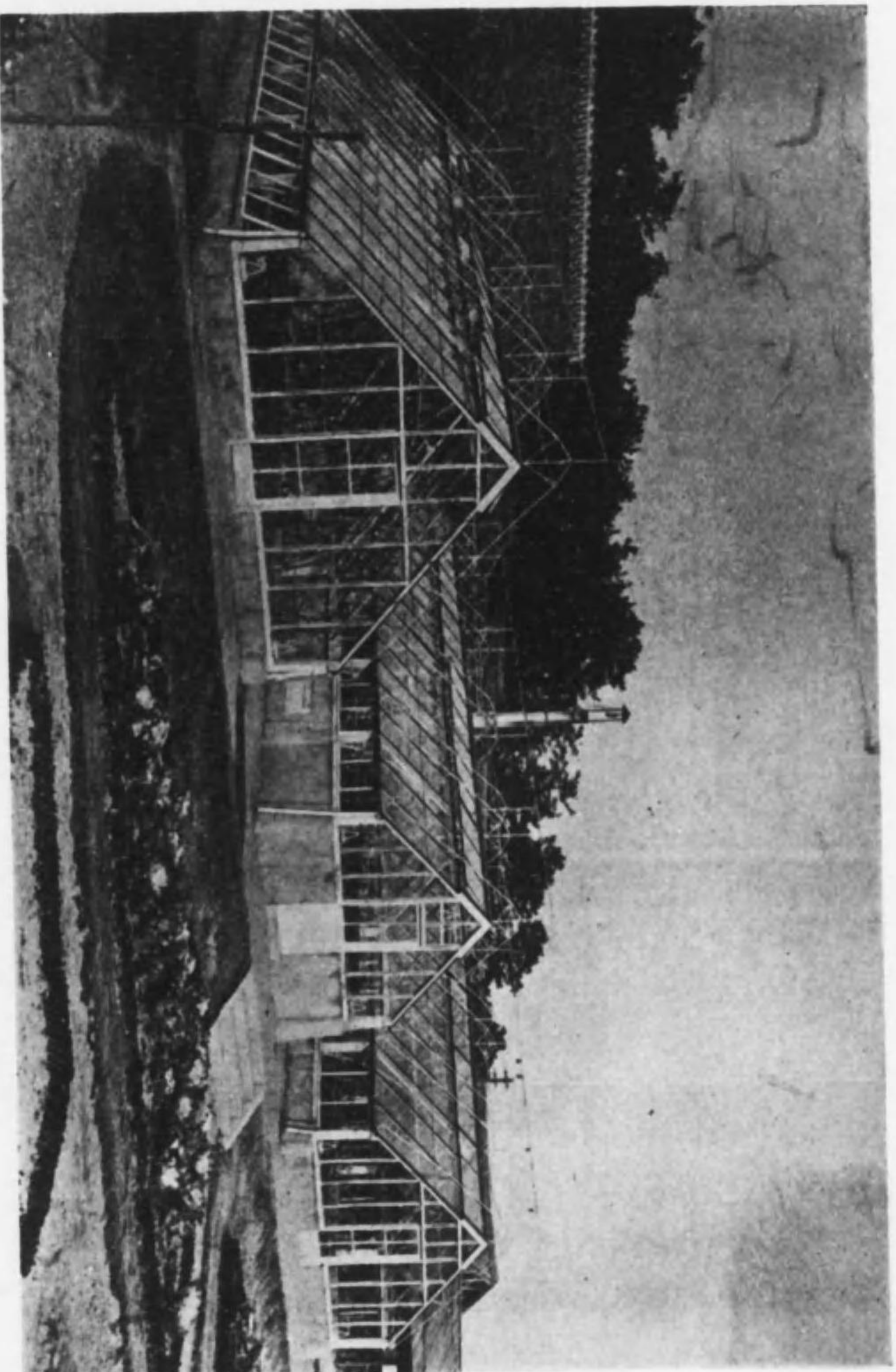






カーターズ・アールズ・フエボリツト

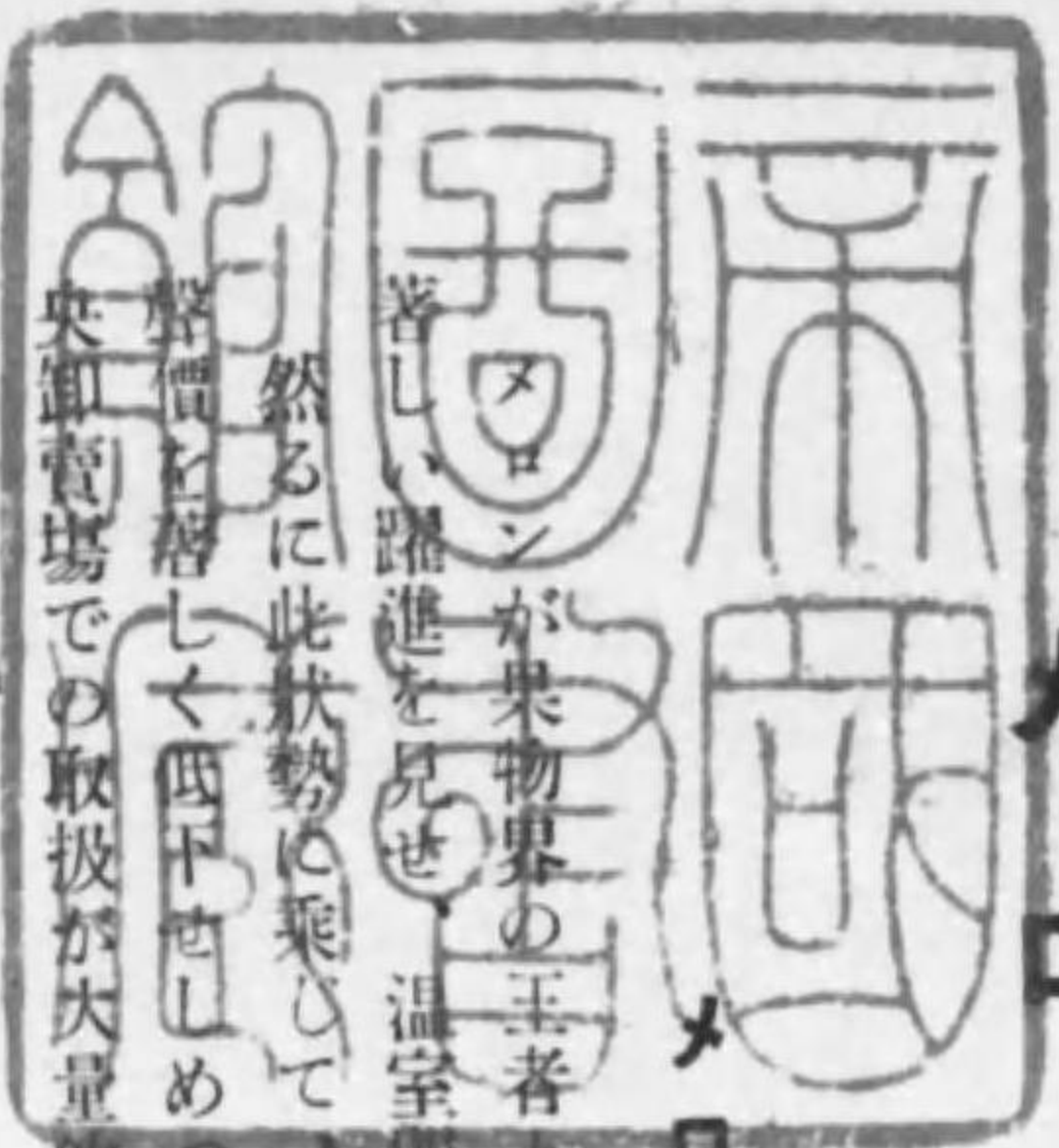




本校温室

# メロンの栽培

教諭 羽 生 節 講 述



## メロン栽培の現状

メロンが果物界の王者として、文化の向上と共に益々需要の範囲を拡大し、其生産の營利化も著し、躍進を見せ、温室即ちメロン栽培を聯想させる域に迄達して來た。

然るに此狀勢に乗じて、品質の劣悪なものを、大量的に生産するものが續出した爲に、メロンの相場を著しく低下せしめつゝある。之は一面、卸賣市場の組織の變革にも起因するものであつて、卸賣場での取扱が大量的である爲に、質よりも外觀の如何によつて、相場が決定される必然の結果でもある。

かくしてメロンの聲價は、價格と共に著しく低下して來たが、更に今日以下に安價に販賣される様になつては、極度に資本化された温室栽培では、既栽培の價値を失ふに至るからして、栽培者は常にメロンが持ち得る最上の眞價を發揮せしめ、最高級品としての品位保持に、最善の努力を致さねばならないと思ふ。

メロンを最も大量に生産するのは、靜岡縣で、特に濱松市附近に多く、此地方は大部分が胡瓜の後作に床作りをなし、組合組織のもとに、外形によつて出荷を統制し、大量取扱の市場目當で、質



よりも量をとるふ歩み方をして居る。次が神奈川縣で、東京、山梨、福島、岡山の順序となつてゐる。品質の優良なのは神奈川縣産で、東京市場で確實な地位を占め、東京、山梨、静岡の順序となつてゐるが、各生産者によつて相違のあることは勿論である。

三重縣下には現在千五百餘坪のメロン温室があり、栽培の歴史は極めて新しく、數年前からの栽培ではあるが、大阪市場では相當の聲價を得つゝある。昭和八年度の大坂市場出荷は、静岡、愛知に次いで第三位で、二万五千圓内外に達し漸増の傾向にある。

### 品 種

メロンにはレテイキュラータス(マスク・メロン)、カンタルーペンシス(歐羅巴系カンタループメロン)、サツカリナス(パイナツプル・メロン)、イノドーラス(ウインター・メロン)の別があり、我國で栽培されるものゝ大部は、マスク・メロンに屬し、露地用としてウインター・メロンが、僅かに栽培されてゐる位である。

#### 一、マスク・メロンに屬するもの

網目のあるメロンで、英國種は温室に、米國種は露地に栽培される。

温室内に栽培される殆ど總べてが英國種で、品質最も優れ、赤肉種、綠肉種、白肉種の三種がある。

**サツトンス・スカレット** 我國で古くから栽培され、成熟すると皮は黄色になり、ネットも非

常に細く現はれて見事である。肉はスカレット色で、香氣も高く棚持が長く、各地に廣く栽培されたけれども、アールス・フェボリットが出現してから、味が淡白であるとされて、其地位を奪はれてしまつた。

**ブレンハイム・オレンヂ** 成熟した時にも、外皮は灰綠色で美しくないが、果は圓く、ネットも細く出て、獨特の強い香氣と味を持ち、走肉種中將來ある品種とされてゐる。

**アールス・フェボリット** 外皮は灰綠色で、成熟すると黄味を帯びて来る。肉は淡綠色を帯び甘味が極めて強く、栽培も容易で、今日最も廣く栽培されてゐる。

**ゴツデン・グリーン・クキン** 香氣肉質共によいが、成熟間際に花落ちから裂開する缺點があり、栽培上からこの點を防ぐと綠肉種として將來ある品種である。

**バーネット・ヒル・フェボリット** 外皮の色は初めは眞青であるが、成熟すると濃黄色となり、外觀が非常に美しく、白肉で貯藏力も強い。一般には餘り栽培されないが、將來ある品種である。

**ブリテイッシュ・クキン** 果皮は灰綠色、白肉で品質がよく、殆ど酸酵することがないから、夏作メロンとして、暑熱の際にも果が奇形となる様なことがなく、良種であるが唯果形が小さく、二百匁位で夏作としては小さ過ぎるのが缺點である。

**ヒーロー・オブ・ロツキング** 白肉種中の良種であるが、酸酵し易いので市場で歡迎されない。  
**大井** ヒーロー・オブ・ロツキングを基として作出されたもので、品質がよく栽培も容易である。

#### 二、ウキスター・メロンに屬するもの

マスク・メロンとは全く性状を異にし、ネットがなく平滑で、貯蔵に堪へ露地に栽培されるものである。

**ハネ・デユウ** 佛國に古くから栽培されたもので、香氣はないが甘味強く、貯蔵輸送力最も強く、乳白色又は淡いクリーム色の果皮を有し、肉は淡緑色である。四疋位に達するものあり、以前米國から多く輸入されたが、近頃は本邦で温室に栽培して、マスク・メロンに匹敵する品質のものが出来る様になつた。之を温室に栽培する場合は、マスク・メロンと取扱を異にしなければならぬ。

### メロンに對する嗜好と需要

メロンといへば、スカレットかといはれる位に、一般に廣く栽培され、汎く需要されたものであるが、現在では綠肉種のカータース・アールス・フェボリットの栽培が全盛で、香氣はやゝ乏しいけれども甘味に富み、且栽培が容易な點から、サットン・ス・スカレットに代つて來た。

スカレットが形と色とに於て、一般の嗜好に合致しながら、其需要の激減を來したのは、甘味に乏しいからであつて、赤肉種に甘味の強い品種を作出する事は、吾等に與へられた問題であるといつてよい。

白肉種は一般に品質が優秀であつて、一部の人々に愛好されてゐるけれども、大衆の嗜好に適しないために、栽培するものが少い。

最近ハネデウが米國から輸入され、或は岡山を中心として生産され、京阪市場に需要が多く、高

價に取引されてゐる。本種はネットがなく、頗る甘味に富むけれども、香氣がないから東京では需要が少い様である。

メロンは栽培技術の如何によつて、其品質に著しい差異を生じ、従つて價格の上にも、雲泥の差を生ずるものであるから、優品の生産に努力しなければ、豫期しない打撃を被るものである。

メロンの需要の最も多いのは、七月中元の頃で、贈答用として多く用ひられるが、生産も多いから價格は割安で、大体八月と共に一年中で相場場の最も低いときである。

### メロン栽培の温室

メロン用の温室は大形のものよりも、小形温室の方が栽培が容易で、連棟温室は特によくない。冬は東西向の四分の三式(スリークォーター)が、温熱光量共に充分で生育がよく、南北向の兩屋根式では、西側の半分は光量不足のため、發育が遅れるから良好でない。夏は兩屋根式がよく、室の大きさは四分の三式が八尺五寸(二・五米)、兩屋根式が二間(三・六米)の間口で、奥行は何れも十間(三十米)位のものがよい。

温室は天窓を出来るだけ大きく、棟木の兩側に通しの窓として、夏季の換氣を充分にし、夏季温室としての機能を、完全にしなければならない。兩側の高さは四尺(一・二米)以上とし、側窓は或は設けなくてもよい位である。

屋根の勾配は六寸(一八釐)でよく、ガラスは正一分(三釐)板が、保存上も栽培上も有利である。

暖房装置は温室の大小によつて、規模も自ら異なるものであつて、百坪以上の温室では、ポイラーも専属火夫を置いて、セクショナルの如き管理式がよく、小形温室では無管理式が経済的である。遠山式、西尾式、増井式、藤崎式は何れも無管理式ポイラーで、各地に採用されてゐる。パイプの配置は、ベンチの下を通る様にし、百五十分の一の勾配をつける。坪當り二吋半のパイプを五間(三十米)位の割で配置すると、此地方で嚴冬季にも、最低六十五度の温度を、保持せしむることが出来る。

栽培する床には、ベンチ(揚床)、地床、箱の三種があるが、ベンチが最もよく、地床では大形のものが得られ、且つ管理も楽であるけれども、品質が劣悪である。濱松地方のメロンは此方法である。山梨縣も地床であるが、一尺(三十糎)以上も床に、石礫を敷いてゐるため、ベンチに變らない品質のものが得られる。

一箱に一株づゝ栽培する箱作りは、病氣を恐れての様に考へられるが、發育も充分でなく、管理も不便で價値ないものと思ふ。

### 栽培の時期

順調に發育すれば、發芽後四ヶ月で收穫が出来るから、年四回の栽培が不可能ではない。然し消毒、土入等の作業のため、普通は三回に止めてゐる。

第一回は三月上旬下種して、六月末から七月上旬にかけて收穫するもので、栽培の最も樂な時期

である。然し味は劣る。

第二回は八月上旬に下種して、十一月下旬から十二月上旬に收穫するものであるが、温度が下降して行く時期で、發育が緩慢であり、病氣の發生が多く、且病氣に對する抵抗力が弱いから、栽培が最も困難である。併し品質はよいものが出来る。

第三回は十一月中旬頃下種して、三月に收穫する。此の時期は光線の射入に、不足を來す様な事さへなれば、栽培が樂であり、品質の優れたものが出来る。

要するに冬季は經費は富むけれども、栽培が容易で優品を産し、メロン栽培には最も適期といつてよい。夏季高温時には、雌花の着生が悪いのみならず、品質が劣悪であり、秋冷の氣候では病害の發生が多いのである。

### 用土の調製

砂礫の混在する、極めて粘性の強い、新しい即ち病毒のない赤色粘土がよく、乾固した團塊は、灌水しても容易に崩壊せず、最後まで床土が團粒組織を保つて、排水と通氣の極めて良好な状態にある土がよい。即ち灌水した水が、一寸でも地表に停滞する様ではよくない。

無肥料で自由に肥料養分を加減し得る土であつて、百貫(四百疋)即ち約七立方尺(〇・二立方米)に對し、石灰、薬灰、骨粉、鯨粕各五百匁(二疋)、米糠を一貫(四疋)の割合に混合し、三ヶ月前から堆積し、二・三回切返をして置く。石灰と薬灰は十日間以上間を置いて混入する。用土はなるべく細碎



せず、ごろ／＼のまゝ使用することが肝要である。

### 下種と育苗

植付本数の約三割増の種子を、清潔な川砂に少量の薬灰を加へて、深さ三寸(九糎)の平鉢に入れて下種する。覆土は三分(九糎)位でよい。豫め水苔の中で催芽したものを、川砂に植付けてもよい。発芽に要する温度は、攝氏の二十五度から三十度で三―八日で発芽する。

発芽後は甲折葉の間に、本葉が出現したら、早速四寸鉢に上げる。此の時の用土は前記の定植用土に、三割位の川砂を加へたもので、ごろ／＼の混在したまゝのものを用ふ。

苗は根を痛めない様に掘り取り、甲折葉を左手で軽く握り、右手で土を入れるのがよく、決して軟い莖を握らない様にする。

植付後は充分灌水して、一時日蔭に置き、甲折葉が生氣を得たら、直に室内に入れて日光に當て、決して覆等をして長く日蔭に置いてはならない。灌水は充分にして、回数をなるべく少くする方がよい。育苗中に發育を阻止することはよくないから、二週間前から鯨粕と茶種粕を、等量に加へて腐熟せしめて置いた、だし肥のうすめたものを、發育に應じて施用する。

### 定植

二列植は二尺五寸乃至三尺(七五―九〇糎)幅のベンチで、最も普通に行はれる方法である。一列

植は栽培が容易で、ベンチも一尺二寸(三六糎)幅位のものでよい。ベンチの深さは五寸(一五糎)で株間は一尺乃至一尺四寸(三〇糎―四二糎)とする。用土はごろ／＼した粗塊のまゝ盛り、中央の植付場所は二寸(六糎)位高くする。

定植は発芽後夏季は十五日、冬は二十五日位して、本葉が二枚展開し三枚目が出る頃がよく、本葉が五、六枚を生ずるまで、鉢に置くことは、發育を阻止することが多い。根が鉢内からみつかない内に植付けて、其當夜の間に二寸(六糎)位も、根が培養土中に伸出して行く位でなければよくない。

植付後は根付肥として、稀薄な出し肥を施し、尙如露で葉面から充分灌水して、培養土全部を濕らすことが肝要である。

植付後日覆を要する様なことでは、既に第一歩を誤つたものとしてよいが、然し萎らすと其の後の發育が著しく遅れるから、やむを得ず覆をして之を防がねばならない。

### 灌水の要領

定植後數日間、即ち根が床土内に蔓延するまでは、葉面から充分に灌水する。冬は午前十一時頃から正午迄位、夏は午前六時と午後四時頃を、大体の標準として、常に土壤の乾濕に注意して行ふ。灌水量も冬と夏によつて、或は晴曇によつて、其量を異にするべきは勿論であつて、要するにメロソに聞き其の顔色を、見守りながら施す心得であつて欲しい。

メロンに對しては、一般に灌水を控へ目にして、却つて發育を阻害してゐる様な傾向があるが、土壤の状態がよく、灌水してもスウツト水が透過して行く様にすれば、相當多く灌水しても何等差支がない。灌水量が少くて、止むなく回数を多くするが如きやり方はよくない。

開花期中特に灌水を控へる必要もなく、授精の良否は、灌水量の如何よりも、樹勢の強弱如何によるものであるから、強弱何れにも失しない様に、肥培せなければならぬ。

成熟期に灌水量を控へ目にして、多少萎凋せしめた方がよいとなす人もあるが、注意しなければならぬことで、樹を萎らすことは自然根を傷め、細根の活力を失はせ、樹の榮養に障害を與へることになる。ために果は成熟を不當に早める結果となり、良質のものが得られなくなるのである。故に最後まで順調な發育を持續せしめて、決して作爲的に果の成熟を早めしめない様に、灌水に注意しなければならぬ。

灌水用水は、なるべく汲置きのものを用ひ、株の周圍二、三寸(六―九糎)を離れた處から、床土に一樣に灌水する。

何時の時期でも、灌水(即ち土壤水分)の極端な變化はよくないが、特にネットの出現する時には、其害が著しく、果に裂開を生じて腐敗し易く、又ネットが縦に太く入つて、外觀を損ずるものである。

### 温度と湿度

メロンに對する理想的温度は、十八度から二十七度位の間で、兩極の較差をなるべく少くして栽

培するのがよい。併しメロンは比較的高温にたへ、四十五度位でも日焼を起すことはないが、かゝる高温では徒長して、雌花の着生が悪く、七、八月の栽培がこの爲に困るのである。

本校では夏季も、側窓を密閉したまゝ栽培する關係上、六月末頃になると常に三十度を越えてゐるが、著しい影響を受けることなく、或程度的高温は差支なきものとしてゐる。

尙ほ温度が十度位に低下すると、發育を停止する様なことはないが、緩漫となり授精が不充分である。

灌水量は相當多くしても、室内はなるべく乾燥状態に、置く様にしなければならぬ。特に開花期と成熟期には、其必要が大きい。ネットの出現期には、やゝ室内濕氣を多くした方がネットの出がよく、極端に乾燥せしむると、果皮が硬化してネットが完全に出ない。

### 光量

如何なる場合でも、メロンに覆をして栽培することはよくない。ガラスを透して、弱められた光線が射入るのであるから、なるべく多く光線を入れる様に、温室を建設すべきで、温室面に受ける光線の八割以上を、射入せしむることが出来れば、理想的であるとされてゐる。

一列植が栽培上有利とされるのも、此の點に起因すべく、又冬期兩屋根式よりも、四分の三式の温室が結果がよいのも、此の光線の射入量に關係するのではないかと思ふ。

### 換氣の取扱

温度の項に於て述べた様に、本校の換氣法は全生育期間を通じて、天窓のみによるものであつて、此點が一般栽培者と、著しく趣を異にする様である。従つて温度湿度の調節も、全く天窓の開閉のみによるので、側窓及び入口等は常に密閉し、夜間は天窓も閉ぢるのである。唯成熟期に二週間位僅かに側窓を開けて通風せしめてゐる。

側窓を閉ぢたまゝ栽培するために、未だかつて瓜守の被害を受けたことなく、病害の發生も少い。そのみならず發育も順調で、授精に何等の障害がなく、ネットの出現も極めてよく、メロンの栽培の秘訣の一つは、此處にあるといつてもよい位である。

故に天窓は棟木の両側に通して、充分換氣の出来る様に設備し、日中は充分展開して、温度の高まるのを防がねばならない。

天窓の開閉は朝夕又は晴曇の如何によつて、室内温度を調節しつゝ、行はなければならないことは勿論である。

### 肥 料

メロンの風味並に發育に、絶大の影響をもたらすものは、實に施肥の如何によるものであつて、肥料の種類、施用期、施用量に注意し、發育に應じて肥料の過不足がなく、收穫の最後まで充分な肥料養分があれば、他の條件に多少欠くる處があつても、或程度の成果を擧げることが出来るのである。

一般に灌水して栽培する場合には、養分の流失が甚しいものであるが、此點に不注意のために、肥料不足に陥り易い傾向がある。

メロン栽培では、元肥は樹を作るためのものとし、追肥によつて味を附けるのである。而して肥料の種類によつて、風味、品質に影響することはいふまでもない。

練粕はメロンの肥料として、缺くことの出荷ないもので、甘味を増す上に最も有効であるが、餘り多過ぎると甘味が強過ぎ、又纖維が多く、種子が充實し、果を切つた際、中味即ち種子の附着部分がだらけ落ちて、好まれない結果になる。

骨粉もなくてはならないが、多過ぎると成熟くしても熟色が出来ず、従つて樹に長く置くために醗酵し易くなる。殊に此現象は三、四月收穫の場合に多い。

馬糞を使用したものは、果實に塩味がしてよくないとされてゐるから、既肥類を使用することは考へものである。

米糠はメロンの肥料として、必須のものであり、極めて良好な風味と肉質を持たせるものである。菜種油粕もよく、熟色をよく出す。

要するに肥料の種類によつて、各特色を持つものであるから、肥料を單用することは、甚だ危険であつて、適當に混用しなければならぬ。

元肥は培養土は豫め混入熟腐せしめて置くことは、既に述べた通りである。追肥は鉢上げ當時から、花粉の交配前迄は、發育に應じて、練粕と菜種粕とを等量に混じて腐熟

せしめた、出し肥の上澄液を適宜施す。

蔓が一尺(三〇種)位に伸長した時に、株當骨粉十五匁(六〇瓦)位を施して、五分(一・五種)の厚さに土入れ(トップドレス)をする。

第二回目は交配を始める二、三日前に、株當煉粕五匁(二〇瓦)、菜種油粕五匁(二〇瓦)、藁灰五匁(二〇瓦)を施し、六分(一・八種)位の土入れをする。

更に第三回追肥として、選果を終り網掛をする頃、株當煉粕七匁(二八瓦)、菜種粕八匁(三二瓦)過燐酸石灰三匁(一二瓦)を施し、一寸の厚さに土入れをする。

土入れをすると根が盛に新しく入れた部分に伸長して来て、樹の勢力が盛になる。之に用ひる土は、培養土の残りでよい。

### 支柱及び結縛

支柱には女竹を使用し、二列植でベンチ栽培の場合は、支柱の頭を通路の方に、少し傾けると手入に便利であり、又果が日光に當ることが少いから、果皮の硬化を防ぎ、ネットが出易い。如何なる場合でも、支柱は作物に安定を與へるだけの大きさにし、ラファイヤで結び付ける。支柱は定植後に立てるよりも、支柱を立て、之にそうて植付くる方が理想的である。

### 整枝と摘心

親蔓を其まゝ伸ばして一本仕立とし、夏は十七・八枚、冬は二十二・三枚の葉を附けて摘心する。

此範圍内では、メロンは親蔓には結果しないで、子蔓の第一節目に、雌花を着生するものであるが、時に雌花を缺除するものもあり夏季に特に多い。

果實は親蔓の中央部、即ち十三節目位の側枝に結實させるので、十節目位から五本位の側枝の残して、他は出次第なるべく早く除去する。

株の下方に結實したものは、品質がよいが小形であり、上部に成つたものは、大形ではあるが品質が悪く、ネットの出工合も悪い。従つて兩者の中間的性質を持つ、中央部に成らせるのである。

残す側枝は雌花の上に二枚の葉を附け、都合三枚で摘心する。側枝上の腋芽は全部除去する。如何なる場合でも、摘心はなるべく早くかき取るので、又物を用ひない方がよい。巻鬚や不要になつた雄花の叢群も基部からかき取る。勢力の旺盛な蔓では各節から不定芽が次々に發生するから芽の内に除く。

雄花の脱落したものや、摘芽で出来た葉片等を葉上に残す時は、此部分から病害に侵される心配があるから常に注意して除く。

摘芽、摘心はなるべく晴天に行ふがよく、傷口には硫黄華と消石灰を等量に混合したものを塗附して、病菌の侵入を防ぐ。晴天であれば、何物も塗附しなくてよいといふ人もあるけれども、安全

な方法ではない。又昇水等を用ふる場合もあるが、効果的でない様に思ふ。

### 交配及び摘果

交配は温度と天氣の如何によつて、時刻も異り、夏は九時頃、冬は十時頃迄に行ふ。盛夏の高温時は、七時頃迄にしなければ既に晩く、要は雄花の花粉が葯上にあつて、正に脱落しようとする頃が理想的であつて、曇雨天の場合は晩くまで交配し得る。

其方法は雄花を取り、花瓣を除き葯を露出せしめて、雌花の柱頭に軽く而も充分につける。同一株上の雄花をもつて、授粉しても結實しないことはないが、授精の歩合が悪いから、他株のものを交配せしむるのが普通である。

交配の時期に、灌水を控へるが如き必要はなく、唯換氣を充分にして、室内の濕氣を少くすることとは前述の通りである。交配と同時に日付の札を附けて、成熟を豫知し又交配の確否を知る上に便利ならしめる。

授精が確實なものは、とみに果梗が長大となり、果は次第に下方に向ひ、三、四日後には果は母指大になり、既に結實が確實化する。

此時に結實の位置と、果の形狀を吟味して、一株に三個残し、他は枝と共に切去る。果は長形で形が正しく、果の色は白味がかつたもので、花痕が小さく果梗の長大なものを残す。其後二回に亘つてなるべく手遅れぬ様に摘果を行ひ、雞卵大になつた時一個にする。

幼果の内に球形なるものは、發育が悪く小形のものとなり、初め長形のものも發育がよく大形果となる。

一株に二個結果せしむることは、敢へて不可能ではないが優品を望み得ないから、實際栽培上は不利である。

### 接木法

多數の中には雌花が着生せず、或は極端に上部に着いて困る場合があるが、かゝる株には適當な位置に、側枝を出して置いて、之に接本をするのである。

花粉の交配をしたものを、翌日になつてから接穂とし、楔形に切つて側枝の節間から切斷したものに割接をなし、ラファイヤ或は毛糸で縛る。接穂の切斷面を外に現はさない様にする。

### 網掛

果が母指大となつたら、結果枝をラファイヤで軽く吊つて、枝が下らない様にする。果が徑二寸(六厘)位になつたら、網を掛けるのであるが、之に用ふる網は漁網の斷ち屑を利用するのがよい。

網は四隅を麻糸で吊り、ゆとりを置いて、結果枝の基部から、下り目に果が位置する様に掛ける。幼果は軽く葉に觸れただけでも傷が付くから、決して葉にこすりあてることのない様に、細心の注意を以てしなければならない。

### ネットの出現

交配後二十日位するとネットが出始めるもので、最初は縦のものが現はれ、次第に横のものを増加する。大体三段に分れて出現するものである。株の勢力が強くと充分な發育をして居れば、第三次のネットが完全に出るもので、果面は極めて細かな網目が、而も判然と浮上つて来るものである。斯の如く美しいネットが出たものは、其品質も極めて良好であつて、ネットの良否は、品質判断の重要な項目なのである。

ネットの出る頃は、灌水を平均にして、過不足のない様にしないと不揃となり、水分が多過ぎると、縦の太線が多くなり、外觀を損するのである。果を常に日光に直射せしめると、果皮が硬化してネットが出難いから、葉蔭になる様にし、室内の濕氣は平生よりも、多い目にしなければならぬ。

### 成熟と收穫

交配の日から五、六十日を経過すると、成熟するものであるが、時期と品種によつて相違があり、早生種では夏季四十日、冬季五十日位、晩生種では夏季六十日、冬季七十日位を要する。尙管理法の如何によつても多少の相違を來し、極端に灌水を控へたため、或は他の原因によつて、株の早衰せる様な場合は、成熟が早まるのが普通である。併しかやうなものは、充分の味が出ない。

成熟の度は、赤色種では果皮の色が黄變し、香氣を室の内外に放つ様になるから、果色の變化し始めに採收する。

樹上に完熟まで置くと、輸送力がなくなり、果梗が離脱し易くなるから、注意しなければならぬ。

外皮の緑色のまゝ成熟するものは、判定がやゝ困難であるから、交配の日付札によつて大体を豫測し、尙豫め試食によつて熟度を鑑定して採收しなければならぬ。

アールス・フェボリットは果色が少し白く褪せて、更に淡黄色に變化するが、此時期が完熟期であり、採收の好時期である。

然しかくの如く完熟したものは、棚落が早く、商品としては、既に採收の時期を失してゐるといつてよい。故に今少しく早目に、適當の時期を見て、採收しなければならぬ。

一般當業者、殊に地方の經營者に多いことであるが、若採りのために味が充分に出てないものを出荷して、折角の努力に報いられない様な事が多いから、適期を知ることが肝要である。

又肥料等の關係で、完熟してゐながら熟色が出ないために、樹に長く置かれて、酸酵する場合があります。春三、四月收穫されるものに多い。

今アールス・フェボリット種につき收穫の適期を知るに、必要な事項を挙げると、

- 1 日數を大体の標準とし、夏は五十日、冬は六十日で成熟する。
- 2 果梗の周圍が上つて来る。

- 3 果梗の周圍に輪狀にネットが出る。
  - 4 花痕部に弾力を生ずる。
  - 5 果皮の色が白味がかつた時は、成熟した兆である。
- 以上の諸點を総合的に考慮に入れた上、更に試食し適確な熟期を判定して、收穫する様にすれば最も安全である。

收穫するには、出来るだけ枝を長く附けて切ることが必要である。そうすると市場或は商人は取扱の都度、枝を切り詰めて切口を新らたにし、果實に新鮮味を持たせることが出来るので都合がよい。

果梗を脱落せしむると、商品としての價値を著しく低下するものであるから、果梗には觸れない様に取扱はねばならない。スカレットの如きは、完全したものは、觸れただけでも落ち易いものである。

### 貯蔵及び出荷

アールス・フェポリットはスカレットに比して棚落が早く、夏は殊に貯蔵に堪へない。完全したものは、二、三日で後熟が充分に出来て食用に供せられ、後熟が進むと次第に花痕部が軟くなり、酸酵して風味が悪變する。故に出荷期を失したものは、高級品としての取引がされず、著しく不利を招くものであるから、メロンは貯蔵してはならないものと考ふべきである。

然し冷涼で乾燥する場所であると、冬は二十餘日、夏は十日位は貯蔵が出来るものであるが、果が接觸したり、花痕部を直接板に觸れしむると、早く此部が腐敗するから、臺を作つて据ゑる様にしてしなければならぬ。

荷造りは、市場の販賣の方法によつて趣を異にするので、大阪中央卸賣市場の様な所では、上下に選別した均等なもののみを、三個宛の小箱入として出荷するがよい。

東京の高級園藝市場では、市場自身が十個單位に上下に選別して、相對賣買をするのであるから、容器も何等制限の必要がなく、輸送に便利なものを選定してよい。

小箱に入れる場合は、硫酸紙で包んだ上を更に新聞紙で包んだ方がよく、後者の場合は新聞紙で巻き、果梗を保護する様に、新聞紙を折曲げるとよい。

果實と共に、箱に填充するものに、臭氣を有する場合は、メロンにうつり香がするから、無臭の粉殻が一番よい。小箱の場合は、各箱に一々蓋をすることなく、數個を組合せて一梱にして繩掛をする。

### 温室の消毒

温室は培養土の搬入前に水でよく洗ひ、乾燥した處で、ベンチ其他の下方部を市販の石灰硫黄合劑の五十倍液で消毒し、尙室を密閉して硫黄を燃焼し、亞硫酸瓦斯を發生せしめて、病虫害の徹底的驅除をなすこと。之は最も安價で、而も効果大きく、千立方尺(二七立方米)に對して、硫黄華一

斤(四八〇瓦)を燃焼し、一夜密閉放置する。

### 病 虫 害

**うどんこ病(白澁病)** 高温多湿の時に発生多く、葉面に白い微状の斑紋を現はし、被害の著しいものである。

室内の乾燥を計り、硫黄華を撒布するか、キヤンベル氏のサルファペーボライザーで、硫黄蒸気の燻蒸をすると、簡単に防除が出来る。

**べと病(露菌病)** 草勢の弱に時、或は高温多湿の時に発生し、黄褐色の多角形病斑を現はし、遂に全葉に及びて枯死するものであるが、燐酸、加里を併用して、草勢を旺盛ならしむる時は発生しない。四斗式石灰ボルドウ液を、撒布すると効果がある。

**キヤンカー** 莖葉が軟弱で、高温多湿の時に発生し、秋の栽培に最も多く発生する。春作の場合には、勢力が強いから、発生しても乾燥を計ると、其株も最後まで持ちこたへるが、秋作では發病部が腐敗して、遂に枯死する。

菌は傷害を受けた所から侵入して、維管束を犯すもので、其部は銜色になり、褐色の汁を出す。本病は治療の方法がなく、唯乾燥を計つて、病勢を阻止せしむる程度の手段より外ない。摘心其他傷害を與へた時は、直に硫黄華を塗附して豫防し、発生したら直に抜き捨て、他への傳播を防ぐのが、最上の豫防方法である。尙石灰を患部に塗附して、汁液の他に散ずるのを防ぐことも一方

法である。

**腐敗病** 果の尻が腐敗する病氣で、一種の腐敗菌が、花痕部の傷口から侵入して腐敗を起すのであるが、灌水の極端は變化によつて、果に裂開を生じたり、或は花瓣が其儘萎着し、腐敗を始めて、果實にまで及ぶことが原因とされてゐる。

故に灌水に注意し、花瓣は枯死後丁寧に除去し、被害果は他に腐汁を附着せしめない様にして、なるべく早く除去する。

**蚜虫** 蕃殖が甚だしく、新芽に被害が大きいから、發生の初期にネオトン類で驅除し、全体にわたる時は、エキスルオール、ユリニコパウダー等の燻蒸をして驅除する。

**スリツプス** 室内が乾燥する時に発生し、葉は白い緋の様に傷付いて、甚だしく衰弱する。室内の過乾を防ぎ、蚜虫と同じ方法で驅除する。

**赤だに** 室内が乾燥すると発生し、蕃殖旺盛で大害をなすものである。室内の過乾を防ぎ、発生したら、市販の石灰硫黄合劑の百五十倍液を、果にかゝらない様に覆をして撒布する。

石灰硫黄合劑と石灰ボルドウ液を、同時に使用すると藥害を起すから、何れかゞ消滅してから、撒布する様にならなければならない。

デリゲンの撒布も効果大きく、且硫黄合劑の様に、汚點を止める様な事がないからよい。硫黄華を千立方尺(二七立方米)に對し、三匁の割合でペーボライザーで燻蒸するのもよいが、亞硫酸瓦斯を發生せしめない様に注意を要する。



冬補温する時には、鐵管に、硫黄華に少量の石灰を加へて練つたものを塗り付けて置くと、防除の効があるとされてゐる。

瓜蠅 成虫は葉を食害し、幼虫は根に食ひ入り、枯死せしめるもので、幼虫の被害が大きい。成虫は捕殺し、幼虫に對しては、かんこう殺虫劑四匁(一六瓦)を水一斗(二〇立)にもみ出し、此液を一株に二合の割で根元に灌注するのである。

ネマトーダ 根を食害する線虫で、驅除は不可能とされてゐるから、培養土は此被害のない場所から選ぶ必要がある。新しい土地の心土を用ふるか、反當石灰窒素十五貫(六〇疋)を施した、田地から用土を採ると安全である。

以上は病虫害の主なるものであるが、温室の側窓を閉ぢて栽培すると、病虫害の發生が少く、又瓜蠅の被害を受ける様なこともない。

尙病害豫防のためには、蔓の發育を旺盛ならしめ、病害に對する抵抗力を強くし、温室には病害のために、藥劑を撒布する必要を認めないといふ信念のもとに、肥培、管理の上に徹底を期せなければならぬと思ふ。

昭和十年 六月一日 印刷  
昭和十年 六月二日 發行

定價 金五錢

三重縣四日市市朝日町  
著作兼 發行 者 羽 生 節

發行所 三重縣立河原田農學校

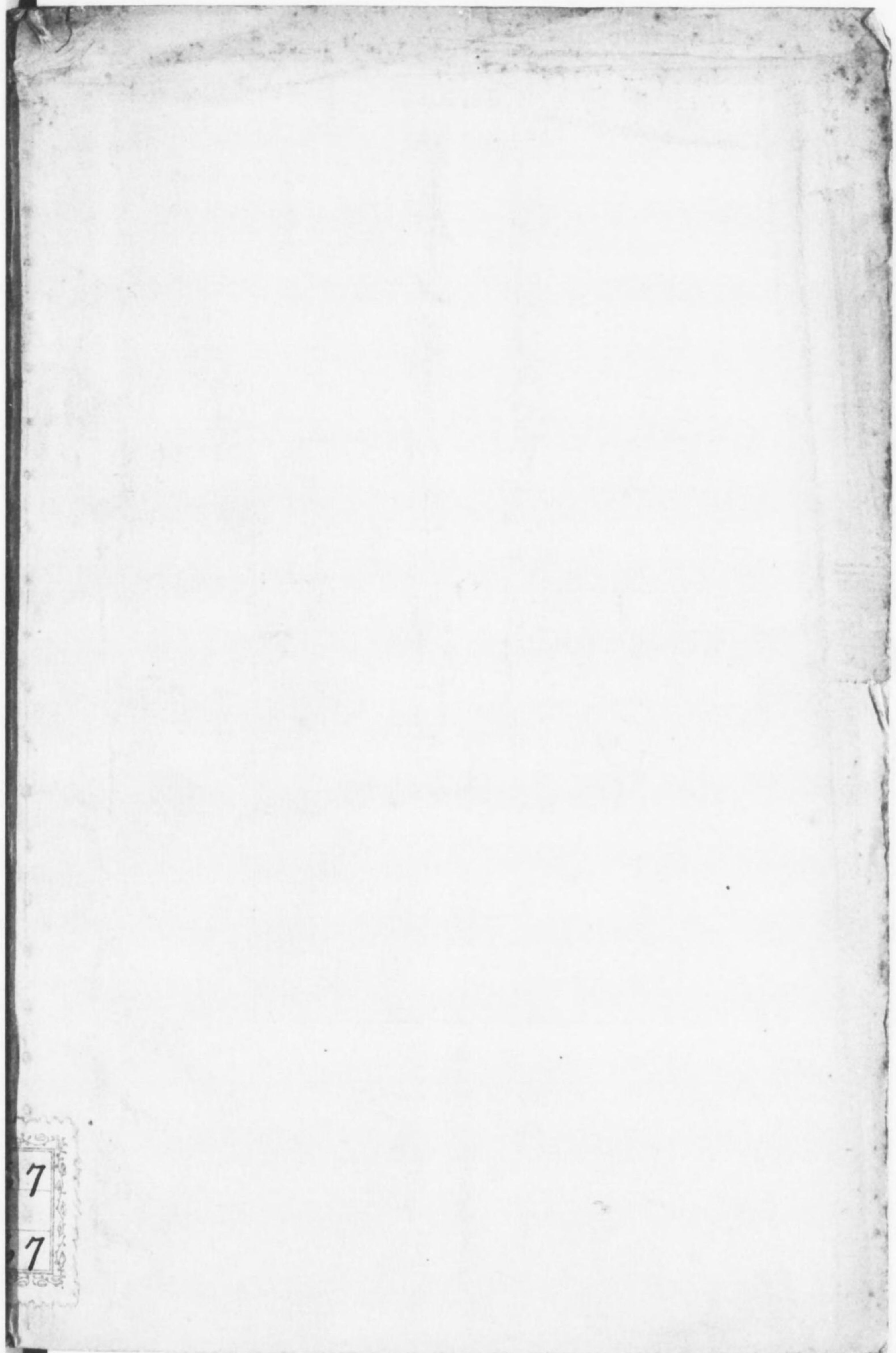
三重縣四日市市南川原町七九五番地  
印刷者 岩 谷 喜 三 郎

同 印刷所 青 雲 堂 印刷所

電話 四三三九番  
編者 大阪一七九三二番

不 許  
複 製

終



7  
7